

図書紹介

渡辺雅子著

『納得の構造』

—一日米初等教育に見る思考表現のスタイル—

宮 寺 晃 夫*

読んでいて目から鱗が落ちる本に巡り合うのは幸運だが、本書（渡辺雅子著『納得の構造—一日米初等教育に見る思考表現のスタイル—』）はわたしにとってまさにそうした本の1冊である。読み終わって、長年の胸のつかえがとれた気がして、文字通り“納得”させられた一書である。

私事にわたるが、20年ほど前、文部省から在研の機会を与えられて、家族とイギリスで暮らした。出国直前、小学3年生の長男には日本の学校から1学期分の通知表が渡されたが、そこに記された成績は、どうみても芳しいものではなかった。各教科とも、相対評価では「中の中」、観点別評価では○と△が半分ずつだが、所見欄と行動の記録には、「自分勝手なことばかり言う」「協調性がない」などのネガティブな記述が目立っていた。「学級委員長」をしていたようだが、教師の目には、先走りばかりする目立ちたがり屋に映っていたようだ。ところが、丸1年イギリスのミドル・スクールに通って帰国直前に受け取ったスクール・レコードでは、「イングリッシュは作文も会話もエクセレントな進歩がみられた」「数学と科学にとくに興味をもっていた」などと、各教科とも目を疑うほどの褒め言葉が充ちていた。もちろん、5・4・3・2・1の相対評価はなく、教科の評価はすべて記述式である。生活面でも、「自分から積極的にクラスに溶け込み、活動に参加していた」などと評価され、ネガティブな記述は一つも見当たらなかった。

同じ子どもなのに、どうしてこうも食い違う評価がなされたのであろうか。それが長年胸のつかえとなっていたのである。

この食い違いは、日英間の評価観の違いによるものであろうと、とりあえず受け取ってきた。そうした評価観の違いが何によってもたらされるのかについて、さらに考えてみることもしなかった。欧米の人たちは褒めるのが上手で、だいい

※筑波大学大学院人間総合科学研究科

ち英語には、人を褒める語彙が潤沢にある。そうした“俗説”による説明で満足してきた。

しかし本書を読んで、そうした説明が表層なものであることがはっきりした。問題は褒め上手のお国柄や、使用言語の特質にあるだけではない。それよりもっと深いところに問題の核心がある。それは、教師が子どもに養おうとしている力と、それを育てていくやり方の違いにある。そのことを、本書は日本とアメリカの小学校での作文指導と、歴史の授業の違いを実例に、分かりやすく解き明かしてくれている。

著者によれば、日本での作文指導は、遠足の思い出の作文がそうであるように、朝起きて、学校に行って、バスに乗って、現地に着いて、弁当を食べて、バスにまた乗って帰ってくるまでを、順序よく書くように求めていく。この順序で書かせていきながら、子どもに楽しかった気持ちを表現させていく。つまり、日本での作文指導では、何がどうであったかを、時系列にそってたどるように指導される。起承転結の作文技法は、今も昔も、日本の作文指導のお手本である。そのため、作文全体で言いたいことは、最後の「結」にまで引き延ばされることになる。

歴史の授業でも同じように、歴史上の出来事にそって、何が（誰が）どうであったかをたどらせ、その時代と人物に子どもの気持ちを寄り添わせながら、歴史に共感させていく。こうした日本の作文指導と歴史の授業で養われようとしている力は、「共感力」である、と著者はいう。

それにたいして、アメリカでの作文指導では、「何がどうであったか」を時系列でたどらせるのではなく、はじめにまず、言いたいことは何かが書かせられる。そこからはじめて、どうしてそうなのかが書かせられる。歴史の授業でも、「なぜか」がはじめに来るように指導される。つまり、結果が先にあって、そこから原因をさかのぼらせていくような指導がなされるのである。そうした原因遡及式の指導を通して養われようとしているのは、「分析力」である、と著者はいう。

このようにいうと、本書は日米の教育方法論の比較研究の書であるように思われるかもしれない。そういう面もたしかにあるが、本書がすごいのは、日米で育てられる力の違いが、日本人とアメリカ人の思考のスタイルの違いをも意味しているとしている点である。人の話を聞いて、日本人が納得するスタイルと、アメリカ人が納得するスタイルとは違っている。日本人は、時系列にそって状況が説明され、最後に結論が語られていくと納得する。いっぽう、アメリカ人はまず結

論が語られ、そのあとで「なぜならば」と理由が説明されると納得する。こうした思考のスタイルと、納得の構造の違いを突き止めたことが、本書のすごい点である。

本書がさらにすごいのは、思考のスタイルと、納得の構造の違いが、日米の社会の仕組みを反映するとともに、それぞれの社会のあり方を規定していることも、明らかにしているからである。それゆえ本書は、教師は子どもの思考をどのように指導すべきかを教えてくれる思考指導論の本であるばかりでなく、思考指導が社会のあり方にどのように関わっているかを解明した教育社会学の本でもある。

同じ子どもに、ある国では辛い評価が与えられ、別の国では褒め言葉が与えられる。こうした食い違いは、けっして、関わった教師の資質だけの問題ではないであろう。評価観の違いは、それぞれの国の社会的なあり方との関わりで解明されるべき問題でもある。それを本書は、単なる自説として主張するのではなく、実践の分析を通して実証しているからすごい。

渡辺雅子著『納得の構造—日米初等教育に見る思考表現のスタイル—』

東洋館出版社、2004年9月、2,700円＋税。